様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６２８９２２４

研究課題名（和文）国土基盤としての〈千年村〉の研究とその存続のための方法開発

研究課題名（英文）Research on evaluation method of "Millennium Village" for its continuation

研究代表者
中谷　礼仁（NAKATANI, Norihito）

早稲田大学・理工学術院・教授

研究者番号：３０２６７４１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　9,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は国内において、千年単位で長期的に持続した居住環境を〈千年村〉と名付けその位置を地名学から抽出し、実地調査によって持続要因を分析し、長期持続に貢献する評価方法を開発することを目的とした。
成果として古文献に記載された地域名をもとに約2800もの〈千年村〉候補地をプロットし、その成果をマップとしてネットで公開した。また関東、関西において200近くの同候補地を訪れ、さらに地形環境の違いごとに詳細調査を行い、持続の要因を検討した。その結果〈環境〉〈地域経営〉〈交通〉〈集落構造〉の4項目による地域評価リストを公開提案し、それに基づいて地域が持続していることを認証するシステムを構築し公共に与した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to develop an evaluation method that contributes to long-term sustainability, by extracting the position of Village considered last over a thousand years in Japan from the geographical name, which we called "Millennium Village", and analyzing sustain factors by field survey.
As an outcome, about 2,800 places are plotted, which considered as the candidate of "Millennium Village" , based on the the place name described in an old documents. The plotted map is available by internet. Also, in order to elucidate the factors of sustainability, we visited nearly 200 candidate Millennium Village in Kanto and Kansai, and we conducted detailed field survey for each different topographic environment. As a result, a regional evaluation list was proposed, which consists of 4 items: <environment> <regional management> <traffic> <village structure>, and an authentication system, which certifying that the area is sustainable, was established and given to the public.

研究分野：建築史

キーワード：地域アセスメント　郷土史　古代地名学　民家集落　交通史　地域経営　環境学　共同体

１．研究開始当初の背景

日本における歴史的集落・町並みの研究と保存は充実し、関連する検討分野も多様化している。しかし既往の諸制度における地区選定の方法では、特に突出した固有性を持つ地域が重視されることが不可避である。

一方で何世紀にもわたり生活が営まれてきた地域は日本全国に多数存在する。古文献『和名類聚抄』（931-938 年）には、当時の全国の郷名が約 4000 箇所列挙されている。これらの郷名は既往の地名学者によってすでに比定地分析がなされていた。試しにこれら比定結果の一部を地図上にプロットしてみると、ほとんどの地域が、沖積層とその他のより古い時代の地層との境界近くに立地する傾向が見られた（図 1）。すなわち千年を越えて人間が居住を続けてきた地域とは、稲作・畑作を持続的に展開しうる、地質・地形上の優良な特性を有する場所であり、それはまさに日本の国土の土地利用と景観の基層をなすと考えた。この地名比定のプロットによる持続的地域の発見と地域維持に貢献する評価方法の開発が〈千年村〉である。

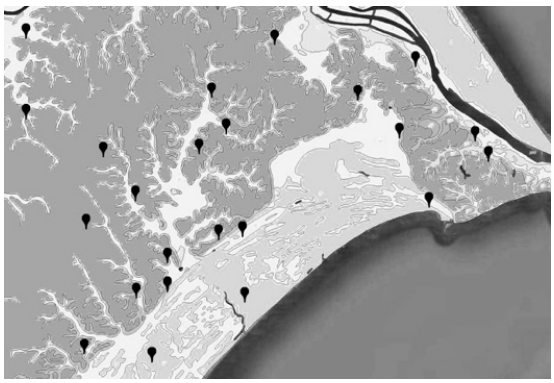

図 1･〈千年村〉候補地立地と地質図（千葉県）

２．研究の目的

本研究ではこの仮説を基本に、千年を単位として生産と生活が存続した地域を〈千年村〉と名付け、

（1）『和名類聚抄』の郷名比定地を〈千年村〉候補地として網羅的にデータベース化し、その分布及び立地特性を全国的視野で地図上に可視化する

（2）研究組織の所在する関東及び関西において候補地の現地調査を複数おこない、〈千年村〉候補地の特性とその持続の要因を明らかにする

（3）これらの研究分析に基づき、対象地域の評価方法を開発し、今後の地域存続のための客観的な要因分析を提示することを目的とした。

３．研究の方法

（1）〈千年村〉データベースの作成と公開

『和名類聚抄』記載の郷名中、比定可能な地域を〈千年村〉候補地とみなし、全国データベースを完成させる。データベースは、地図上にプロットして様々な情報を与えた GIS データベースとし、ウェブで公開する。このデータベースによって実地調査地を決定する。

（2）実地調査・〈千年村〉持続要因の解明

研究拠点である関東・関西地域において、悉皆調査と詳細調査の 2 段階の調査を実施する。建築学、造園学、民俗学、景観工学の研究者の連携により、総合的な分析をおこなう。悉皆調査では、広域的な分布と立地の具体的傾向、詳細調査では集落構造と持続性の主要因を分析する。

（3）〈千年村〉の評価と存続手法の提案

各地域の存続に関する普遍的要因と個別的要因を明らかにすることで、〈千年村〉を評価し、その要因を元に地域の今後の存続手法を提案する。さらに将来的にはそれら地域間の交流の基点づくりをもめざす。

４．研究成果

（1）〈千年村〉マップの作成と公開

〈千年村〉マップを作成しウェブ上で公開した（http://mille-vill.org/）。〈千年村〉の立地特性を全国的に把握可能となった。

①『和名類聚抄』の郷名が大字規模で比定される該当箇所（3986 件中 1977 件）について『角川日本地名大辞典』及び『日本歴史地名大系』など複数の既往研究を照合し作成した。

②作成したデータを空間上にプロットするための経度、緯度情報を付記した。これらを〈千年村〉候補地とし、デジタル地図上にプロットし、かつ地形図や地質図、古地図、国土基盤情報等を重ね合わせることでその立地特性を把握可能な簡易 GIS として作成した。

③作成したウェブサイトにおいて、閲覧者から〈千年村〉に関する情報提供を可能にするためコメント欄を作成した。当ウェブサイトは、コンピュータープログラマー・元永二朗氏によって制作された。（以上 26 年度）

④地図種類とプロット情報を追加。一般地図、シームレス地質図、植生図などのほかに土地利用図、川だけ地図を許諾のもと追加した。また近世初期文書『おもろさうし』と北海道環境生活部アイヌ政策推進室によるアイヌ地名分析を用いて『和名類聚抄』で欠落していた沖縄地区、北海道地区を付加した。（27 年度）

（2）実地調査・〈千年村〉持続要因の解明

悉皆調査と詳細調査の二段階で行なった。

①悉皆調査

悉皆調査範囲は、〈千年村〉候補地が水系に集中する傾向があることがプロットから判明したため、関東研究拠点は主に利根川水系による悉皆調査（群馬、茨城県）を、年度をまたいで設定した。そのほか比較調査を相模川水系、筑波山周囲で実施した。訪問した〈千年村〉候補地においては事前に土地の特性を土地利用図、地質図、迅速測図、航空写真によって把握し、現地においては居住地域、生産地域、交通立地、景観特性を確認し、全ての候補地において土地断面による利用特性を記録した。年間で概ね 30 から 40 の悉皆的訪問と調査を行なった。成果はすべて年度ごとに各報告書を発行し関係機関に配布した。ま

た建築学会大会などにおいて関連発表を行った（26、27、28 年度）。
②詳細調査
関東拠点における詳細調査は利根川水系に沿って群馬県五料、小川島（山間地）、山名、一宮（段丘地）、韮塚（低地）、茨城県麻生（浦）という立地特性別で行なった（26、27、28 年度）。初期には報告書にてまとめたが地域住民による地域のオーソライズを目的として後述するワークショップ形式に展開した。
関西地域担当班は、YCAM（山口情報芸術センター）と実施した山口市鋳銭司村和西地区の調査成果に基づき YCAM にて「屋垂れの村―山口市鋳銭司村和西地区における詳細調査報告―」展を開催した（27 年度）。奈良県桜井市初瀬、三重県津市大里睦合町田井について街並み評価や地域景観策定に関する調査を行なった（28 年度）。
③居住者参加による地域特性把握のためのワークショップとオーソライズ手法の開発
詳細調査後半にあたっては、本申請の最終目標である持続的地域一般の評価アセスメント手法開発へむけて、詳細調査の成果を用いて、地域の人々とともにワークショップを行い、地域の特性をオーソライズする手法の構築を試みた。各地域において、地域特性を表したポスターやパンフレット形状の成果物をワークショップで作成し、成果は地元に配布した（図 2）。この方法は地元に地域のアイデンティティを付与するのに大きく貢献し、地元の複数の HP で掲載された。

図 2・ワークショップによる地域の特徴を語るポスター（五料）

（3）〈千年村〉の評価と存続手法の提案
①チェックリストの公開
これまでの実地調査に基づき長期持続地域評価のためのチェックリストを公開した。それは地域の前提となる《環境》、人的活動を示す《地域経営》、そして調査途中においてその重要性が認識された《交通》、それらの結果形成される《集落構造》という 4 つの評価要素を基軸とするものである（図 3）。このチェックリストの項目とそのリストの使用方法が本研究の知的財産と成果である。チェックリストを各地域が主体的に用い自己検証することが可能である。
②認証組織としての運営
それらチェックリストを客観的に認証するための活動を本研究組織が継続して運営することとした。その認証行為のプロセスはウエブサイトにて公開した。

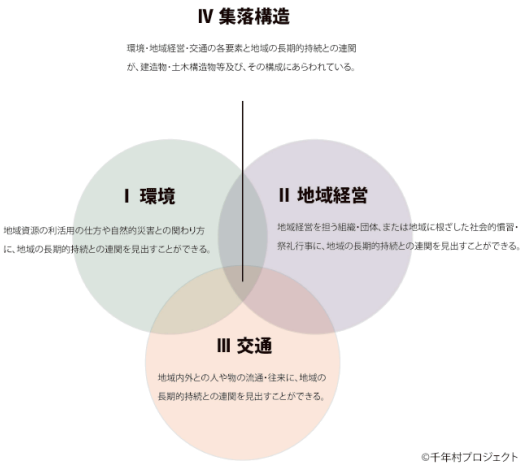

図 3・〈千年村〉研究による地域評価の 4 要素

③全体総括としてのシンポジウムの開催
本研究活動の集大成として二回のシンポジウムを運営開催した。「地域の持続のかたちを考える - 千年を生き続けた知恵を活かし、ふるさとの暮らしを未来につなげるために - 」（7 月）ではこれまでの千年村の評価手法開発を中心に紹介し他の活動団体とのディスカッションを行なった。「千年村はいかに可能か」（11 月）においては本研究組織にて認証を行なった地域の当事者を呼び、今後の地域経営のあり方を多角的に紹介した。いずれも二百名を超える一般参加者を得た。またこれらの活動内容がその後複数の媒体において紹介された。社会的な反響は大きく、公的な成果は http://mille-vill.org を通じて全て公開している。

５．主な発表論文等
〔紹介記事〕（計　8　件）
(1)（ｂｅ　ｒｅｐｏｒｔ）「千年村」を探せ名も無き集落に持続可能の秘密、朝日新聞、2017.10.21

〔学会発表〕（計　23　件）
(1)田熊隆樹、中谷礼仁、養蚕民家が現在の生活に与える影響、絹産業資産等調査委託研究成果発表会、2017.3.25、旧本庄商業銀行煉瓦倉庫（埼玉県）
(2)北野美里、木下剛、霞ヶ浦周辺における千年村町字の分布特性と地形立地に関する研究、日本造園学会関東支部事例・研究報告会、2016.11.27、東京情報大学（東京都）
(3)鈴木明世、中谷礼仁、アイヌ語地名から見る現北海道沙流川流域における生活空間その変遷過程の解明−千年村研究その 8−、日本建築学会大会、2016.8.26、福岡大学（福岡県）
(4)木村真拓、中谷礼仁、古琉球と現代沖縄の空間的連続性をもつ集落地域に関する研究

－千年村研究その７－、日本建築学会大会、2016.8.26、福岡大学（福岡県）
(5)本間智希、清水重敦、古代国家機能周縁の集落構造について 山口市鋳銭司地区和西集落における千年村研究 その1、日本建築学会大会、2016.8.24、福岡大学（福岡県）
(6)福嶋啓人、清水重敦、民家における土庇「ヤダレ」の機能について 山口市鋳銭司地区和西集落における千年村研究 その2、日本建築学会大会、2016.8.24、福岡大学（福岡県）
(7)近藤真、木下剛、相模川流域周辺における千年村町字の分布特性と地形立地に関する研究、日本造園学会関東支部事例・研究報告会、2015.11.12、日比谷公園　緑と水の市民カレッジ（東京都）
(8)金盛晋也、木下剛、防災面からみた相模川流域周辺の千年村町字の立地の妥当性に関する研究、日本造園学会関東支部事例・研究報告会、2015.11.12、日比谷公園　緑と水の市民カレッジ（東京都）
(9)神保洋平、中谷礼仁、生産・交通・立地の連関構造分析からみた集落における長期継続要因に関する研究―上州蚕糸業と絹流通構造を事例として 千年村研究その6,日本建築学会大会、2015.9.4、東海大学（神奈川県）
(10)小林千尋、中谷礼仁、地名の成立時代からみた村落の持続性に関する研究―村落空間モデルとしての町字分析を通じて 千年村研究その5、日本建築学会大会、2015.9.4、東海大学（神奈川県）
(11)元永二朗、中谷礼仁、佐々木葉ほか、デジタルコンテンツ構築と水系及び河川流域に基づく悉皆的集落調査の方法-千年村研究その4-、日本建築学会大会、2015.9.4、東海大学（神奈川県）
(12)梶尾智美、木下剛、千葉県の千年村漁村の空間的領域に関する研究、日本造園学会関東支部大会事例・研究報告会、2014.11.9、山梨大学（山梨県）
(13)相原雄太、木下剛、関東地方における千年村の立地特性に関する研究、日本造園学会関東支部大会事例・研究報告会、2014.11.9、山梨大学（山梨県）
(14)木下剛、千年村の意義と千年のまち国見について、第3回国見町歴史まちづくりシンポジウム、2014.10.19、国見町観月台文化センター大研修室（福島県）
(15)庄子幸佑、中谷礼仁、地名からみた現代社会における古代の影響に基づく地域社会評価の手法-〈千年村〉研究その2、日本建築学会大会、2014.9.12、神戸大学（兵庫県）
(16)中谷礼仁、平安期文献『和名類聚抄』記載郷名の現在比定地を用いた〈千年村〉抽出方法に関する研究-〈千年村〉研究その1、日本建築学会大会、2014.9.12、神戸大学（兵庫県）

〔調査報告書〕（計　8　件）
全て本研究組織による成果発表物
(1)筑波山周辺疾走調査報告書、2018、124
(2)大阪南部疾走調査報告書、2018、28
(3)群馬県高崎市吉井町神保地区　詳細調査報告書、2016、51
(4)茨城県行方市麻生　詳細調査報告書、2016、39
(5)相模川流域疾走調査報告書、2015、68
(6)利根川流域疾走調査報告書、2015、157

〔図書〕（計　1　件）
(1)中谷礼仁、千年村プロジェクトの射程、早稲田大学・震災復興研究論集編集委員会編『震災後に考える』、vol.1、2015、407-416

〔その他〕（計　7　件）
(1)「千年村プロジェクト」
http://mille-vill.org/
(2)「座談会・千年村プロジェクトの始まりと活動報告」
http://10plus1.jp/monthly/2015/12/issue-01.php
(3)「千年村プロジェクト中間報告座談会」
http://10plus1.jp/monthly/2017/04/pickup-01.php

６．研究組織
(1)研究代表者
中谷礼仁（NAKATANI, Norihito）
早稲田大学・理工学術院・教授
研究者番号：３０２６７４１３

(2)研究分担者
木下剛（KINOSHITA, Takeshi）
千葉大学・園芸学研究科・准教授
研究者番号：３０２８２４５３

清水重敦（SHIMIZU, Shigeatsu）
京都工業繊維大学・工芸科学研究科・教授
研究者番号：４０３２１６２４

(3)連携研究者
上杉和央（UESUGI, Kazuhiro）
京都府立大学・文学部・准教授
研究者番号：７０３７９０３０

菊地暁（KIKUCHI, Akira）
京都大学・人文科学研究所・助教
研究者番号：８０３１４２７７

佐々木葉（Sasaki, Yoh）
早稲田大学・理工学術院・教授
研究者番号：００２２０３５１

(4)研究協力者
石川初（ISHIKAWA, Hajime）

土居浩（DOI, Hiroshi）

福島加津也（FUKUSHIMA, Katsuya）

元永二朗（MOTONAGA, Jiro）